

時空を超えて天平の薨を忠実に再現

美郷町南郷

西の正倉院

もう一つの正倉院



西の正倉院 (平成8年3月完成)

工 期：平成4年3月12日～平成8年3月30日	横 幅：33.168m
敷地面積：5,714.400㎡	奥 行 き： 9.288m
建築面積： 549.427㎡	床 下 高： 2.500m
延床面積： 308.064㎡ (軒まで入れれば549.43㎡)	総事業費：16億2044万7千円
高 さ： 12.980m	
構 造：木造校倉造り高床式構造 もくぞうあせくらづくり	東 柱：木造(直径 600 ミリ)
屋 根：本瓦葺き 38,800 枚 (平瓦 22,300 枚、丸瓦 10,000 枚)	基 礎：自然礎石・鉄筋コンクリート造
小 屋 組：木造和小屋 わこや	地 形：PHC 地形杭
校 倉 壁：校木(長辺 318 ミリ、短辺 305 ミリ)	木 材：木曽松
校 倉 壁：板(高さ 305 ミリ、厚み 90 ミリ)	必要材木：770 ㎡、原木 800 本
床：木造板床(厚 90 ミリ)	宮大工延人口：9,831 人



西の正倉院の沿革

百済伝説を今に伝える神門神社の宝物や師走祭りなどを紹介する博物館。
奈良の正倉院を実物大に複製。外構の門や塀、瓦の模様、神様の井戸など全て奈良時代の建築様式で統一されており、敷地丸ごと博物館となっている。
昭和61年 村民運動として提唱された「百済の里づくり」の一環として計画。当時、①宮内庁所管轄の図面の確保、②用材の確保、③現行建築基準法不適合の3つ問題があり実現不可能と言われた。
建築にあたっては、宮内庁所蔵の正倉院図をもとに、奈良国立文化財研究所の学術支援、建設大臣の特別許可など、計画から完成まで延べ10年の歳月をかけて建てられた。
建築木材は、長野県木曽の天然松(樹齢350年～500年・2000本)を使用しており、その木材を調達するまでも5年かかった。

神門神社 百済王族の父「禰嘉王」を祀る



- ★本殿は国の重要文化財に指定
構造形式：七間社流造(しちけんしゃながれづくり)
上 棟：寛文元年(1661年)
創 建：養老2年(718年)といわれている(伝承による)
- ※ 比木神社(木城町) — 長男「福智王」を祀る
※ 伊佐賀神社(日向市東郷町) — 次男「華智王」を祀る
※ 大年神社(高鍋町) — 母「之伎野」を祀る
- ※ 神門神社の宝物を大別すると・・・
・銅鏡三十三面
・馬鈴(ばれい)
・馬鐸(ばたく)
・須恵器(すえき)
・鉄剣(てっけん)、直刀(ちよくとう)
・銅製の像
・板絵観音(いたえかんのん)
・板葺の神殿

■正倉院をなぜこの田舎に？

- ・奈良の正倉院にある銅鏡と同じ紋様の銅鏡がある
- ・社宝の宝物庫を兼ねる
- ・観光客を呼び込む最高の素材
- ・一般に公開することで韓国との交流も盛んになる

■西の正倉院建設の大きな5つの壁

- ①日本の文化財研究の最高権威である『奈良国立文化財研究所(奈文研)』の学術的な支援を得ること
⇒ (1987年11月～1988年6月)
銅鏡の調査に来た奈文研の先生を通じ、アピール、説明を行っていくうち、昭和63年6月に正式に支援が決定。
- ②門外不出と思われた宮内庁所管の『正倉院設計書』を入手すること
⇒ (1988年2月～1988年7月)
奈良正倉院事務所(3回)、宮内庁京都事務所(2回)、宮内庁書陵部(3回)を訪問し、最後に村の熱意に加え、奈文研の学術支援が後押しするかたちで、図面の閲覧と複図が許可された。
- ③巨大な『松材』の調達
⇒ (1988年2月～1992年)
探しまわった結果、長野県木曽郡南木曽町の国有林の松を入手。
- ④『建築基準法』という法の壁
⇒ (～1992年7月)
4年間に30数回の協議を重ねた。最終的に1200年余り現存している正倉院で立証ができるとの日本建築センターの評定が下がり、1992年7月に建設大臣特別許可(建築基準法第38条)を受けた。
- ⑤巨額な『建設資金』の問題
⇒ 自治省の支援を受けることを予定していたが、基準をはるかにオーバーしてしまい(事業費が一坪あたり1,000万円以上)、「前例がない」と国との調整が難航した。そこで、村と県とが一体となって必死の直談判を繰り返したところ、国が理解を示し財政支援を得ることができた。

唐花六花鏡について



西の正倉院建設のきっかけにもなった、正倉院宝庫の御物と種型を同じくする踏返し鏡である。同型鏡が出土している場所は以下のとおり。

- ①奈良東大寺大仏殿
- ②正倉院宝庫
- ③岡山県笠岡市大飛鳥(おおびしま)
- ④出土地不明(東京国立博物館蔵)

※日本の美術2月号(監修：文化庁)
(1999年2月1日発行・毎月15日発行)に掲載された。



神門を訪ねる方々へ

宮崎県日向市から西へ40キロ。歌人若山牧水の生家と記念館を横目に坪谷川沿いを進み小さな峠のトンネルを抜けます。すると水系が変わり、小丸川沿いに出ます。さらに川を遡り山奥へ進むと、ポツカリと開けた盆地に入ります。ここが美郷町南郷であり、中心地を「神門」といいます。

正面には鬱蒼と繁る杜に覆われた神門神社があり、土塀で囲まれた閑静な一角には西の正倉院があります。ここは「古代史の謎」と呼ばれる百済伝説の村です。

九州山地の百済王伝説

伝説を裏付ける証の一つが「師走まつり」です。90キロ以上も離れた比木神社と神門神社が合同で催す祭りは、1000年以上も受け継がれてきました。文化庁の調査によれば、木城比木神社は高鍋藩、神門神社は延岡藩の領内に鎮座していたことから、祭りは藩域を越えて行われていたとされています。そのことは江戸時代における例外的慣行とは受け取れず、むしろ二藩に分割されることなく、神門・比木ともに同じ支配領域にあった名残ではないかと解釈されています。平成9年には神門神社本殿で大量の鉾や板絵が発見され、これらも西の正倉院に追加展示されています。奉納された鉾の数は1000点余に及び、奉納者が銘記され、形態が多様であることが確認されています。さらに、鉾の柄には記念名が書かれており、なぜこれほど多くの鉾が奉納されてきたのかが民俗学的に分析されています。このような理解が許されるのであれば、祭りの起源は15世紀前半まで遡ることが确实視されます。

(文化庁文化財保護部伝統文化課主任文化財調査官・天野 武)

師走祭りの調査には、翌年から韓国の調査団も加わりました。この背景には、文化庁の調査官が大学に移ったこともあり、韓国の任東権（韓国民俗学会会長）先生との長年の交流が影響しています。「日本の祭りと違う」という文化庁調査官のつぶやきが、韓国の調査官につながったと聞いています。任会長は4年間、師走祭りや現地調査のために村を訪れました。以後、韓国からの調査団の中には考古学を専門とするチームも編成されて来村されました。（平成3年 記録すべき無形の民俗文化財に認定）

伝説には多くの謎があり、多様な筋書きが存在します。この謎解きには多くの方の参加を求めたいと思います。次に、二つ目の証として神門神社蔵鏡群について触れます。奈良国立博物館考古室長と電話で話した際、「神門神社の鏡は有名ですよ」と言われ、初めて自分の村にも有名なものがあることを知りました。「どのように有名ですか？」と尋ねると、「奈良時代の鏡でも日本の10指に入ります。しかも正倉院宝物や東大寺の国宝鏡と同一品など、日本国内で5面しかない鏡があり、これほどの銅鏡が一箇所に伝世されていることは極めて珍しい」とのことでした。また、奈良文化財研究所に問い合わせたところ、「神門神社蔵鏡群の位置づけ」に関する報告書があるということでした。

その報告書によれば、「唐式鏡は神門神社蔵鏡33面の中でも最も注目されてきた鏡群です。特に、唐式鏡の
 二大鏡群として、伊勢湾の孤島「神島」八代神社鏡群と神門神社鏡群が唐式鏡研究において果たした役割は
 多くの研究者によって指摘されています。」と記載されています。(大和文化研究・岡崎譲治)

神門神社鏡群と八代神社鏡群の同磐鏡の分布を考えると、深い結びつきがあり、特殊な相互関係を持つと考えられます。こうした特殊関係を認めた上で、「中央で特別に量産された同種の鏡が、何らかの目的で全国の要地に分配された」（東京芸大・中野政樹）と指摘されており、「配布論が提起されるなど大きな課題が残されています」（神門神社総合調査報告書・奈文研杉山洋）。この他にも直刀の鉄剣や綾織りの墨書、馬鈴、馬鐸、須恵器の大きな瓶などの考古資料も神社に残されています。神門神社の創建は養老2年（718年）で、宮崎県立図書館に残る古公文書によると、宮崎県内の特に古い社27社の中で一番に記されています。ちなみに、鶴戸神宮は3番目にあるとされています。神門神社の正祀は大山祀命とされ、往古この地に百濟王族が定着した由来伝説の霊神となっています。とにかく歴史の古い神社であると言えます。

西の正倉院敷地で多数の土器が出土

西の正倉院の建設に際し、敷地の発掘調査を行うことになりました。調査は宮崎県教育員会文化課の協力を得て、平成7年9月に実施されました。敷地南庭園池の東部分にトレンチを設けたところ、土器が出土しました。敷地内は粘土層の部分で発掘を要しない区域や近世に開田や宅地造成が行われ遺跡が確認できないエリアを除いて発掘が行われました。

発掘現場は西の正倉院の前庭部で、広さは約100㎡です。本格的な発掘調査の結果、弥生土器に近い古墳時代の土師器片が約1500点、完

全な須恵器が3点出土しました。特に注目に値するのは、朝鮮半島から技術が伝わったとされる須恵器であり今後、県埋蔵文化財センターで詳しい調査が行われる予定です。

小路遺跡は「百済の里づくり」事業の主要施設の一つである「西の正倉院」前庭一帯に広がる遺跡です。現在はすっかり宅地化されており、遺跡であることが分かっていませんでしたが、平成5年2月に西の正倉院敷地の盛り土をするため、村教育委員会が県文化課の協力を得て試掘調査を行い、遺跡の存在が明らかになりました。調査の結果、一帯は表土の下に地山が露出しており、古い土層は流出したか後世に削平されてなくなっていました。深く侵食された当時の流露部分のみが残されている状況でした。この自然流露は小規模な谷が土砂で埋没したもので、埋まった山砂利の中から約1500点の弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての土器と古墳時代後期の須恵器が流れ込んだ状態で出土しました。

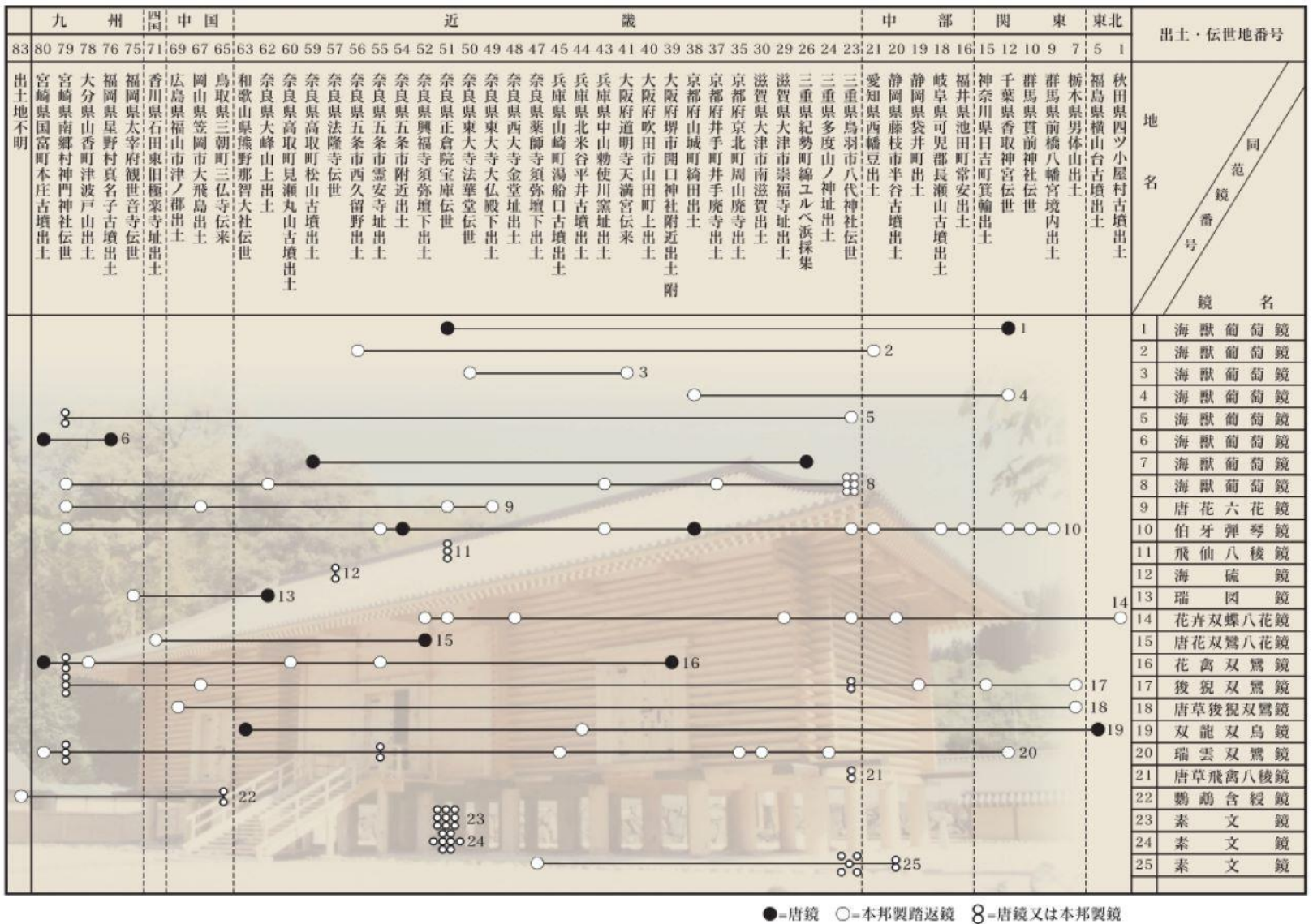
比較的小範囲の発掘で、自然流露可能であつたにもかかわらず、これほどの土器が出土したことは、周囲に当時の集落が存在した性を示唆しています。特に須恵器については、杯という種類が3点のうち2点は完全な形のまゝ出土したため、この谷の近くで祭事が行われた可能性もあります。また、遺跡の南西の水田地帯では過去に木簡が出土しており、これをきっかけに地道な史料収集を行えば、南郷の歴史も解明できるのではないかと考えています。

西の正倉院は、奈良の正倉院を原寸大で再現した宝庫

正倉院は東大寺の境内に建立されている建物で、東大寺は聖武天皇が国の安寧を祈り建立したお寺です。本尊は奈良の大仏として知られる仏様です。「正倉院正倉」と呼ばれる場所には、天平文化を代表する宝物、光明皇后が聖武天皇の遺愛の品々を東大寺に献納したものが納められています。建物と宝物はともに宮内庁が所管しており、勅封され、現在も皇宮警察が常時警備しています。

1300年余の歳月が経過し、老朽化が著しくなったため、大正2年に正倉院解体大修理が行われました。その際に作成された図面の閲覧が、奈良文化財研究所（文化庁）の指導の下、宮内庁の許可を得て行われています。普通の行政官庁ではない宮内庁のため自治体に直接見せることはできず、南郷村の相談を受けている奈良文化財研究所が正式な窓口となりました。

本邦出土・伝世同范鏡相互關係図



学術指導から重要文化財の発見

設計は、京都大学工学部が設立者となっている（財）建築研究協会に委託されました。建築基準法は難題であり、正倉院は建築基準法が確立される前の時代の建物であったため、窓のない建物への入場者の受け入れが問題視されました。この問題は、宮崎県建築住宅課長（建設省出向）と協議を重ねてきた建設省つくば建築研究所第三構造部に持ち込まれました。建築設計を手がける建築研究協会も参加し、構造の要点を計算したデータをもとに関係者で協議が行われ、日本建築センターの評定に委ねる方針が示されました。（平成4年3月13日付けで評定されました。）

造営材のヒノキ探しは村内から調査が開始されましたが、使えるものがないことがわかりました。理由は原木のサイズだけでなく、暖かい地方の木材は成長が早く年輪の幅が広いため、校倉で構成される壁を持つ建物には不向きです。乾燥が進むと建物に狂いが生じるからです。ヒノキの代わりに青森ヒバが使えないかと検討された時期もありました。この間、5年が経過していましたが、諦めの声も上がる中、長野県本曾駒ヶ岳の麓で行われる東洋一と称される砂防堰堤工事があることがわかりました。これにより天然ヒノキの伐採禁止区域が解除され、造営材に使用する木材が調達可能となりました。

造営材は長野県本曾の国有林から天然ヒノキが調達されました。製材や現地での管理、保管などを経て、平成5年5月28日に建設予定地で起工式が行われ、平成8年5月2日に落成式が行われました。準備に5年、建築に5年、合計で10年の歳月がかけられた「小さな村の大きな挑戦」ととなりました。西の正倉院は、神門神社が所蔵する文化財の保存と公開の施設であり、天平文化に直接触れることのできる教材でもあります。この点は、指導や協力をいただいた先生方との約束でもありました。

西の正倉院建設の学術指導に訪れた奈良文化財研究所の建造物研究室長が、神門神社本殿の調査を希望しました。この本殿の調査は、最近の平城京の発掘によって出土した品々によって知られるようになりました。これにより、本殿は平成12年12月に国指定の重要文化財となりました。

外部から見ると、本殿の回廊部分の天井は内部から見ると屋根裏になっており、大量の鉾や板絵が発見されました。この神社本殿は、七間社流造という珍しい造りでもあります。

神門神社三十六歌仙

神門神社本殿の調査で発見された三十六歌仙は、当時宮崎県内にこの道の専門家がいなかったため、熊本県立美術館の学芸員を招いて調査が行われました。画風やサイズの違いから、二組のものであることがわかりました。一組は慶長12年丁未11月に描かれていることや作者名が記録されています。現存するものは14枚で、裏面には「右初一」などの番号が墨書され、その内の2面には銘文が記されています。銘文（柿本人麻呂像表面墨書銘）は以下の通りです。「書画共に肥州阿蘇宮、村山刑部丞書之、慶長12年丁未黄鐘吉良、所願成就来満」、村山刑部が書画共に書いたと記しています。村山氏は代々肥後の国の豪族阿蘇氏（大宮司家）家臣として知られており、戦国期には阿蘇高森の比良城の城主であった村山氏の一族とみられます。

一つ目は、村山氏や阿蘇氏と神門神社との関わりです。現時点では直接の手がかりはありませんが、おそらく中世には阿蘇・高森・高千穂・神門は、ほかの九州脊梁山地に点在した諸豪族間で現在の県境を越えた煩雑な交流がありました。本扁額の奉納は、これまで知られていなかった村山氏や阿蘇氏と神門神社との交流を示す貴重な資料といえるでしょう。また、村山刑部丞の教養やこの地の文化程度も伺えます。おそらく古代以来の名門である阿蘇氏周辺には、伝統文化とそれを尊重する気風が残されていたと思われます。村山刑部の流暢で自信に満ちた和歌の筆跡も十分に伺えます。村山氏はおそらく、身近に手本となる絵を持っていたと思われ、本扁額に見える奈良絵風の素朴な画風は、専門の絵師ではないことをうかがわせます。

天正14年、比良は薩摩との戦いに敗れ落城しました。その際、日向の国・神門に落ち延び、神門神社を氏神とする豪族にかくまわれて窮地を脱したのではないかと考えられます。この三十六歌仙の発見は、阿蘇・高森・高千穂・神門の結びつきがただならぬものであると感じさせます。

二つ目は檜板着色です。額はすべて失われ、当初の形態は不明ですが、絵は薄墨で直接板面に下書きし、砥の粉下地の上に顔料や墨で彩色されています。面貌は細筆で墨及び朱墨などで描かれていますが、濃い墨書き起こ

しは後筆です。衣服の文様も細筆で書き起こされています。顔料は上等なものが使われていますが、剥落も多く、風化などの経年劣化と埃でくすんで見えます。歌仙は置き畳に座し、上部には砥の粉や紅柄色紙形を造り、その上に歌仙名及び歌を墨書きします。画風は江戸時代前～中期頃の土佐派の緻密な作風ですが、補筆・補彩により印象を損ねています。

現存している19枚には銘文がなく、奉納の経緯や制作年代、流派は不明ですが、画風から推測すると、熊本県山鹿市の大宮神社蔵の三十六歌仙扁額（土佐光起筆）などとの類似から、土佐派の作とみられます。当時、土佐派の三十六歌仙絵を入手し神社に奉納することは、地方の人にとって決して容易なことではなかったと思われます。おそらく、この地方の領土など高貴な身分の者の寄進であったのでしょう。近世に至ってもなお神門神社が尊崇され、手厚く保護されていたことを示す有力な遺品であり、今後、この扁額奉納にまつわる記録が見つかる可能性があるでしょう。（熊本県立美術館・神門神社蔵三十六歌仙扁額調査報告書・学芸員大倉隆二）

もう一つの情報

今回調査された三十六歌仙は福岡県立美術館の話によれば九州で3番目に古いものであり、鹿児島県出水市に残されたもの、福岡県宗像大社、神門神社の順になるとのことです。

南郷に伝わる百済伝説について

古代国家である百済が滅亡し、多くの王族が逃れました。彼らは畿内地方に定住しましたが、その後の動乱から、船2艘で筑紫を目指しました。瀬戸内海での時化に遭い、日向灘まで流されることになりました。父の禰嘉王一行は現在の日向市金ヶ浜に漂着し、息子の福智王たちは高鍋の蚊口浦に着きました。それぞれが安住の地を求めたと言われています。父王は現在の南郷神門に、王子たちは児湯郡の木城町比木に定住したとされています。王族は死後、地元の人々によって神として祀られました。そのため、神門神社と比木神社のご祭神となっています。両方のご祭神に関する墓や古墳、伝説にゆかりのある史跡や名所が広範囲に点在していることも、この地域の特色です。

南郷村の勢的条件と地域の発展、師走祭りの賑わい

明治36年近隣町村に先駆けて、今の日向市から南郷の神門、鬼神野市谷まで県道が開通しました。これによって、物資の集散地として繁栄した神門は、全国各地からの移住者が多く訪れる地域となりました。大阪との直接取引を行う商人も存在し、大正11年にはT型フォードの走る姿が写真に残されています。持ち主は基督教の宣教師であり、また天理教や金光教も布教活動をひろげ、その教会は今も残っています。

大正12年には村営発電所も事業を開始し、一大発展を遂げました。百済伝説の証とされる師走祭りは、お正月前に繰り広げられるため、その賑わいは大変なものだったと伝えられています。江戸時代の記録には、正月前に売り物を出し各地の産物を交易する様子が残されており、師走市の賑わいが記録されています。特に椎葉や諸塚など周辺の村々の人々との交流は、たいそうな賑わいを見せ、師走祭りの神楽やせり唄などは今もその名残として定着しています。

終わりに

「美郷町」は様々な歴史や文化を持ちながら、今まで「西の正倉院」をはじめとする文化財を訪れる多くの方々に十分な説明がしきれないことが多くありました。

美郷町としては歴史学や考古学、伝説の謎解き等に興味のある方のご意見を頂きたいと考えています。多くの仲間を得て語り合いたいのです。

また、観光ボランティアにも限界があり毎日配置することができません。この事から本資料を編集しご来館の皆様 に配布することといたしました。この資料をお読み頂いた方、あるいは同好の方々に当地の話をして頂ければ幸いです。

百済の里観光ボランティアの会